

第66号 50円

昭和55年3月25日

内容

1980年代の世界経済.....	1
新年の集い.....	2
千人会.....	3
第106回大学共同セミナー.....	5
第107回大学共同セミナー.....	6
第1回大学院共同セミナー.....	7
大学教員懇談会委員会の準備会.....	8
事業部だより.....	9
館長日記から.....	11
利用状況.....	11

セミナー・ハウス

SEMINAR HOUSE NEWS

発行

財団法人 大学セミナー・ハウス

<所在地>

東京都八王子市下柚木 (●192-03)

電話 0426-76-8511~3 振替口座 東京5-74590番

編集

大学セミナー・ハウス 企画室

80年代の世界経済を考えるに当たって、私は、とりあえず第二次大戦後にできた枠組から出発するが、ただ従来、途上国、あるいは南の世界として一括されてきた国を、産油国と非産油国に分け、西・東・南(1)・南(2)の四つの世界として論じていきたいと思う。

はじめに西の世界だが、ここではその中心をなしているアメリカとEC諸国、そして日本を念頭に置いて話をすすめたい。ここでまず問題となるのは、スタグフレーションと制約の過重である。スタグフレーションは60年代後半にイギリスに始まったといわれるが、70年の景気後退を境にしてアメリカでも非常に大きくなりその傾向が現れはじめた。そしてこれを契機に、今日では先進資本主義圏をおお病弊になったといっている。それをひとつの歴史的展望の中で大きく捉えるならば、次のようにいえることができる。すなわち、50年代初頭に確立した戦後の資本主義体制は、50~60年代を通じてほぼ十数年間、いわゆる第二次相対的安定期を保持してきた。この間、マルクス経済学という国家独占資本主義は、ある意味で目覚ましい成功をおさめたと評価することができよう。事実、ここ

では長期的に高度の経済成長がつつき、完全雇用、福祉国家がほぼ達成されて、労働階級の実質的な生活状態や労働諸条件はいちじるしく改善された。それにともない、政治の上でも相対的な安定が見られ、いずれの国においても労働運動や社会主義運動は体制内化された。それと対比すれば、スタグフレーションは、このような国家独占資本主義が破綻に瀕したことを表すものといえよう。すなわち、ここでは不況を切り抜けるために景気刺激政策を展開するに不況が十分克服されないうちにインフレーションを抑えるために引締め政策をとると、今度はそれが鎮静しないうちに不況が深刻化して、ということになり、財政・金融を中心として景気を維持しながら安定的成長を持続させていくという、ケインズの政策そのものが、選択の余地を失ってしまっ



東京大学名誉教授 大内 力

一九八〇年代の世界経済

た。近代経済学の危機と呼ばれるのもここに由来するといえよう。他方、制約というのは、通常、本の支配力の急激な後退から生じたものである。そして今後もOPEC諸国は石油を世界戦略の手段として使うという行動様式をますます強めるであろう。これにたいして、新しい油田や代替エネルギーの開発の試みも強められようが、現在持ちうる情報で判断する限り、どちらもいちはじりしく高コストのエネルギーになることは避けられない。

第二に、こうした諸事実は国際的な経済的、政治的な対立を尖鋭化させる。すでに70年代にも、失業問題が多かれ少なかれ深刻化するにつれて、国内生産を確保するために、輸出攻勢を強めるとも

に、他国輸入制限を強めるといいう保護主義的傾向がすすんだ。とくに、国内の失業問題や資本過剰を解決するための対外的進出は先進国間の相互浸蝕だけでなく、資本や商品輸出の拡大を通じて南の世界をも巻き込んできたし、最近では第二次大戦前の中国をめぐる列強の闘争が姿を変えて現れてきているように見える。

こうした国際的対立の拡大は、当然ブロック化を促すであろう。30年代のブロック化は、その帰結として第二次大戦を惹き起した。しかし80年代には、こういう分裂・対立が強まりながら、他方では協調の努力も強められるをえな

いであろう。すでに70年代にもサミットをはじめとする国際会議やIMFやGATTのような国際組織を通じて協調のための努力は強められてきた。今後国際政治・外交の側面ではそれがより強くなり、いわば経済における対立・矛盾を、政治なり外交なりの問題として協調の中におさめていこうとする動きは拡大されよう。このように、協調体制が強調されるのは、多国籍企業に見られるように資本の国際化が進み、相互の経済的諸関係を維持しないことには、それぞれの経済がもはや成立しえなくなっているからであるが、それと並んで——かつて私は「弱さの均衡」と表現したことがあるが、東の世界の力が非常に大きくなったので、もはや先進国同士が戦争をすなわち余地がなくなってしまうということも、重要な理由となつている。こうして今後という二面性のもとに、極めて複雑な動きを見せるであろう。

第三に、ここでは最近一部の人の間でいわれている「国民経済の崩壊」が強められるであろう。つまり一方では、上述のように経済がますます国際的な性格を持つようになり、もはや国民経済といった枠でくくれるものではなくなってくる。しかし、同時にそれぞれ国の中では分権化・地方化の方向が強められ、「国民経済」という枠組が稀薄化するといえる。ある。この分権化は、疎外や公害問題といった現代資本主義社会そのものが持つ矛盾を、地域社会のなかで受けとめようとする動きで

春雪の中で「新年の集い」

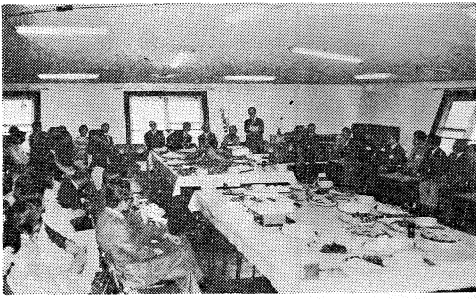
——一九八〇年代の精神的活力を求めて
併せて飯田館長の70誕辰を祝う

期日 昭和55年1月13日

「一九八〇年代の精神的活力を求めて」を謳いこぼに、新年の集いが1月13日に催された。新春第一号の館行事である。

同セミナー委員会の岡委員長、野田、山岸両副委員長の配慮によるところが大きい。

13日はたまたま第107回大学共同セミナー「仏教と人生」の最終日に飯田館長の誕生日が重なったことから西谷啓治、山内恭彦、三枝充憲の三先生による座談会「私の仏教観」が、飯田館長の古稀祝いの意をこめて行なわれた。従って、当日の集会には飯田館長にご縁の深い方々が参加された。共同セミナーと新年交歓会と飯田館長の古稀とを組み合わせ、意義深く新春を祝うことができたのは、共



飯田館長の古稀を祝うパーティ

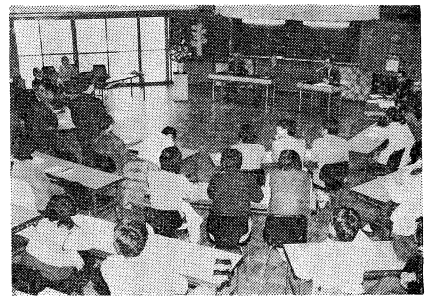
折しも朝から降りはじめた春雪は、受付時間10時半にはすでにかなりの積雪となり、野猿峠は車が不通となるなどの混乱があった。それにもかかわらず参加者はつぎつぎと丘をのぼられ、なつかしい顔を見せて下さった。定刻11時すぎ、白一色の美しい景観に囲まれた講堂には、共同セミナーの指導教授と参加学生に加えて、千人会員、共同セミナーIOB、OG、八王子市民など来賓約50名が席に就いた。和やかな空気のうちに、仏教信仰に生きた人生の最長老の両先生の座談に傾聴した。司会の三枝教授が説明を加えられ、軽妙にして深遠な対話がスムーズに進行した(座談の内容は紙面の都合で次号に紹介を予定)。

以上で会場を本館食堂に移し、古稀祝いのパーティに入った。山岸健慶大教授の司会により次々に祝詞が述べられた(別掲)。つづいて司会者から飯田館長あての数ある祝電のうち、八王子市長後藤聡一氏の電文を朗読、披露された。この間来賓代表明治学院大学神保教授夫人、学生代表、矢内茶道教授門下生から花束贈呈があり、これに答えられて、飯田館長から次のようなお礼の挨拶があった。

「今日皆さんのお顔を見て、お一人お一人と私とのご縁をなつかしく思う。セミナー・ハウスがなければ皆さんと私とのご縁もないし、皆さん相互が親しくなることもなかった。思えばご縁の深い丘であった。ブラウニングの詩に「Grow old along with me」ということばがあるが、皆様と共にさらに齢を加えたいと存じます。西谷先生の今日のお話ではないけれども、大死一番、心を新たに誓って、皆さんから寄せられた温かい心に対するお礼としたいと存じます。」

このあと、地元東京八王子ロータリークラブの東京シューズ会長小俣喜久治氏の音頭で、一同乾杯、今日の雪は天の恵みで、これをセミナー・ハウスの予算で仕立てることは誓って不可能、お蔭でみんな一緒にたのしめる」と爆笑をさそった。

歓談つきぬ中、定刻を少しおくらせて15時、ひとまず閉会、なお残留の有志は用意の別席、交友館と遠来荘に三々五々寄り合っ、コーヒーパーティで、もしくはお茶席や酒席の接待をたのしみ、黄昏



「私の仏教観」を語る座談会

ときには無事、この簡素の中にも心温かく華やいだ宴の幕を降ろすことができた。司会役をおつとめいただいた山岸教授はじめ世話役の皆さんに感謝の意を表する次第である。

接待の庄巻は多摩の民家遠来荘における宴であった。障子を開ければ、白雪の風景が眼前にあり、異口同音に稀れる絶景を讚歎した。西谷、山内両老先生ご満悦、老若の学者が酒杯を交わし、歌があり、談笑が絶えず、現職員と旧職員も仲よく接待役を完うされた。

幸せにも飯田館長は美しい友情の祝福をうけて、70誕辰の日を過ごされた。

◆新年の集いプログラム

昭和55年1月13日(日)

開会(11時)……………講堂

〔司会〕慶応義塾大学教授 山岸 健

▼座談会「私の仏教観」 西谷啓治 京都大学名誉教授 山内恭彦 東京大学名誉教授 三枝充憲 司会筑波大学教授

▼ピオラ・ダ・ガンバ四重奏 神戸愉樹美・高間はるみ 鈴木真理子・岡田 薫

▼スザート作曲「四つのドイツ舞曲」/タヴァーナ作曲「イン・ミネ」/ガヴリエリ作曲「カンツォン第2番」

▼挨拶・来賓紹介 専務理事 岡山 猛 企画室主事 飯田能子

▼新年交歓会(13時30分)……………食堂 飯田館長の古稀を祝って

〔メッセージ〕 木更津工専校長 西田亀久夫 聖心女子大学教授 岡 宏子 日本長期信用銀行 藤本 紘

〔お礼のことば〕 館長 飯田宗一郎 小俣喜久治

〔乾杯〕 東京シューズ会長

〔主なる来賓〕(敬称略) 山内恭彦、西谷啓治、三枝充憲、岡宏子、山岸健、今井淳、池田貞雄、飯尾右一、飯田恵、大貫一、河田喬夫、桐生富久、小島教子、笠原正成、桜井紀昭、神保信一、同夫人、鈴木卓、関順也、田所光子、土田美芳、豊田陽子、長里静子、長松昭男、西田亀久夫、林道義、広瀬五十鈴、藤本紘、松元三郎、松元文字、松崎義徳、森川和久、矢内喜久子

◇◇◇ 下柚木の雪降る里に朋が眼の ひたすらなるを吾の見つめしも 木の葉積む雑木林の学び舎に 機と機のおれるえにしこそ見め (遠来荘における新年の宴席で)

吉田 宏哲 (第107回大学共同セミナー指導教授、編集主任に後日、托されたもの)

◆お祝いのメッセージから

① 西田亀久夫 (国光東洋工業高等学校長)

私と大学セミナー・ハウスのつきあいは実はこれが八王子に建つよりずっと前から始まっていたといいたい気持がある。というのは昭和30年ごろ、社会全体がまだ激動のさ中であつた時代、文部省で学生関係の仕事をしていて、学生諸君を知りたいという気持から各大学の学生に集まってもらい、かなり腹藏ない話し合いをしたことがある。インター・カレッジの試みの初めではなかったか。そんな経験もあり、大学セミナー・ハウス設立の時たまたま学生課長の職にいたこともあつて多少のお手伝いをしたわけだけれども、今やこれが立派に成長して、一つの指標ともなつて、日本の社会の中でセミナー活動というものが日常化しつつあることを本當にうれしく思う。

② 岡 宏子 (聖心女子大教授)

月並みでなく本當にお祝いを申し述べたい。齢をとることはいいことだといふことを、とくに今日のセミナーで西谷、山内両先生の軽妙洒落なお話をきいて感じた。要らないものはすべて棄て本物だけを残していく、人間の本當の叡智のあり方というものを示された感じだ。飯田館長にはますますお元気が長生きをして、齢をとることはいいことだと感じさせるような仕事、他の人の真似できない仕事をしていたいただきたいし、私たち後輩にもっともっとハッパをかけ

つづけてくださるよう、お願いしたい。

③ 藤本 紘 (第1回共同セミナー参加者)

15年前、雨の中をセミナーに集まった感激は忘れられない。この15年間いろんなことが、この丘にもあつたかと思う。組織も大きくなり、入る人の意識も変わっていったと思う。問題は中の人の精神

◆千人会

昭和54年12月〜55年1月

◇現在会員は一、六〇四名です

大学人Ⅱ 一、二〇三名

社会人Ⅱ 四〇一名

◇新しく会員となられた方々

11名 (第52回報告(申込順))
主婦 佐藤美喜子殿
労働金庫栃木支店 福田 雄殿

C お茶の水女子大講師 平野由起子殿

B 多田建設安全管理室 藤澤 清殿

B 幾徳工業大学学長 谷下 市松殿

A 大正大学講師 吉田 宏哲殿

C 関文化産業クラブ代表取締役 坂本 昭治殿

A 洋画家 小島善太郎殿

B 八王子市立長沼小学校教諭 小島 敦子殿

B 世田谷区立松沢中学校教諭 小島 惇殿

B 七宝焼研究家 伊藤 月見殿

C 会費ありがとうございました

54年12月〜55年1月(敬称略)

大須賀政夫、谷重雄、大地三三、山岡喜久男、大谷禎之介、岡本敏雄、伊藤文人、宇野義方、正路徹也、岡

が生きた場所でなければならぬし、それをどう支えるかということにある。ここに集まる人ひとりひとり、それぞれが、セミナー・ハウスを盛り立てて、同じような感謝と感激をもちつづけていってほしい。開館15年といつても、これからが青春期で、成人にはまだまだだ。せめて結婚するまで館長には精神の支えとしてご面倒を見てほしい。

惺治、茂木誠陸、中尾由矩子、村井資長、江上不二夫、西巻正郎、安味貞正、山下幸夫、手塚富雄、市川勝洋、内藤正、尾田幸雄、瀬在良男、小林裕子、斎藤忠利、飯島宗享、絆川薫、杉山吉茂、宮川松男、茅伊登子、加藤朋子、們国男、笠原正成、杉山好、高山成雄、安藤瑞夫、和田木松太郎、山田暉、山科高康、西田亀久夫、大口勇次郎、岡崎正、池宮英才、石田孝夫、関正彦、池田温、濱川祥枝、三戸公、蒲生毅輝、小西正捷、湯本孝、三井爲友、宮本勉、有山正孝、篠沢公平、山崎真秀、速水佑次郎、平松幸一、大畑篤四郎、沢孝一郎、来住正三、吉永フミ、清水誠、築地整、辻誠、末永国明、半谷高久、増田義男、田内幸一、吉田光孝、坂本菜穂、大塩俊介、竹内啓一、岩崎代志治、佐藤蒙、深沢宏、徳久球雄、沼田滋夫、示村悦二郎、佐々木邦彦、関口実、福原満洲雄、湯浅光朝、石井不二雄、高山利勝、三浦安子、三浦永光、伊藤学、山鹿誠次、中尾信之、森恭三、宮部直、竹村研一、小菅敏夫、玉田啓八、木村敏美、山岸健、池田貞雄、天野成光、岩尾裕純、大原洋司、佐島秀夫、飯田恵、福島杉夫、

住田友文、高橋恒郎、山田圭一、石川孝夫、森山俊雄、清水啓三郎、後藤聰一、升本喜兵衛、天利長三、松沢直夫、横沼健雄、遠藤健治郎、隈部正光、古田勝久、水野悦子、伊藤修、福本日陽、鈴木博、斉藤耕二、瀬野信子、大川信明、渡辺忠胤、青柳総太郎、慶伊富長、師岡孝次、天野郁夫、大橋万知江、笠井貴征、武田昌輔、塚本利明、瀬川渡、一番ヶ瀬康子、深沢実、大羽滋、赤松秀雄、新井明、岩下秀男、小林哲也、川本茂雄、中野田、米川哲夫、根岸愛子、園田義道、刈田元司、猪瀬博、川端香男里、久保内端郎、青井和夫、秋山虔、森田豊夫、若林真雄、相原光、深山和子、武藤義夫、松元三郎、長里静子、坂本昭治、鈴木真、吉田宏哲、篠崎武、大川章哉、増地昭男、後藤光一郎、石塚可農夫、岩永達郎、中富光国、佐藤美喜子、佐藤進、上山碩、田上穰治、江幡玲子、乾崇、佐久間純郎、小俣武夫、高橋源次、本田和子、石井明、川崎正三、若山邦敏、鐘ヶ江信光、谷口修、高村新一、打田峻一、鳥居泰彦、伊藤洋、河田敬義、慶谷寿信、中利太郎、永積昭、大原恭子、大豆仁、川喜田愛郎、北原文雄、高橋昭三、小島善太郎、小島敦子、小島惇、飯田能子、小俣喜久治、小林清子、池井優、大即英夫、加倉井茂樹、高木亀一、公文俊平、清水良三、関口晃、原正彦、小川洋輔、中山知雄、磯野修、竹中肇、北村嘉行、松山正男、柳沢富雄、上谷琢之、石井素介、小川政亮、松原元一、原四郎、藤巻正男、小谷正雄、白井泰四郎、藤巻良生、飯田宗一郎、吉川春寿、小山弘志

◇ もう少し近くに在って、気軽にセミナー・ハウスを訪れることが

できれば……と時折り思います。ご発展を念じてやみません。北海道大学助教授 山崎真秀

◇ 今年からB会員にさせていたいただきます。満五〇歳になりましたので。電気通信大学教授 有山正孝

◇ B会員に変更いたします。一橋大学助教授 竹内啓一

◇ 東京YMCAはおかげさまで八〇年で百周年を迎えます。セミナー・ハウスは千人会の発展とともに願っております。東京キリスト教青年会 宮部 直

◇ すっかり老人になったとみえ、健康状態が安定してきました。これからの勉強だと、静かに身構えています。早稲田大学教授 川本茂雄

◇ B会員になります。東京大学 鈴木 博

◇ すてきな誕生カードありがとうございました。とてもなつかしく胸があつくなる思いがします。待ち望んだ息子が誕生、満一歳になります。私の誕生日と同じで二重の喜びですので、少し増やしてBにしました。孤野町立朝上小学校 教諭 水野悦子

◇ 千人会に入会したのは、たしかから大学卒業後一年目の時でしたから早いもので、今回で一三回目になります。セミナー・ハウスのご発展に比べ、自分の成長の悪さに恥じるばかりです。東京芝浦電気 伊藤 修

少額ながら、満五九歳で、五代の最終年を迎えます記念に。

千葉大学教授 中野 卓

「建築文化」9月号を買い求め、セミナーの近況をつぶさに拝見いたしました。一九八〇年代がセミナー・ハウスの一層の飛躍の一〇年でありますように。

主婦の友社 青柳総太郎
鶴籠開処見君子書巻展時逢故人
セミナー・ハウスの在ること嬉し
いかりです。主婦 佐藤美喜子

◇ 小生はA会員でありましたが、昨春定年退職いたしました年金暮らしの身分と相成りましたので、C会員に

変更させていただきたくお願いいたします。元専修大学教授 打田峻一

◇ 今年も元気で七八回目の誕生日を迎えることができました。以前は誕生日ごとに会費をお届けに何うのを楽しみにしていましたが、そのうちに暖かくなったら丘に出かけ発展のさまを拝見させてい

ただきたいと念じております。 弁護士 原 増司

◇ 昨年5月老父八三歳にて永眠、よって年初のご挨拶は控えさせていただきますました。セミナー・ハウスの様子、ニュースなどいづつも拝見いたしております。やや遠くに参りなかなお訪ねすること

もありませんがご発展を祈り上げます。大阪大学教授 茅野良男

◇ 還暦を迎えるについてのご激励を頂き、大いに勇気づけられました。気は若いつもりですが、更にその気になって学究と教育に精励したいと存じます。 東京理科大学教授 北原文雄

(1ページよりつづく)

あるが、それは体制側からは、たとえば田園都市構想の形で現れてくるし、革新側からは従来の中央集権的なソ連型社会主義にたいし、自主管理の要求が強められるという形で現れてきている。

次に、東の世界。ここでも、最近では中ソ対立、中越対立に見られるように、分裂傾向が深まり、一つの圏というよりは様々なタイプの社会主義の寄せ集めといった性格が強められている。ただここでは共通の特徴として、経済の停滞が顕著である。もともと中国の場合、四つの近代化が追求されることによって、外見的には発展路線にのっているように見える。しかし私は、中国は四つの近代化が進むにつれて内部矛盾が深まり、かなり早い時期に社会主義体制をどのように締め直すか、という問題に直面するだろうと考えている。また、ユーゴを除いてコマコン体制下で完全にソ連に抱え込まれてきた東欧諸国も、すでに70年代を通じて急激に経済成長が低下してきている。その主要な原因は、現代社会主義のもつ体制上の欠陥と、ここでも自然的な制約が

強められていることに求められよ

う。従来ソ連は東欧諸国に石油や食糧を輸出しており、それがコマコン体制の柱となっていた。しかしソ連の油田も涸渇状態が強まっているし、新油田はいちじりしくコスト高になっている。また、これと並んで食糧問題の重圧が、むしろ西側より早く加わってきている。80年代における世界の食糧問題の深刻化にたいしては、ソ連の世界穀物市場における買付けがさらに拡大することが予想されるという点が大きく響いている。ソ連国民の消費水準を引き上げようとすると、畜産物需要が増加するが、それに対応するだけの飼料の供給力がないという構造的な問題を抱えている。中国もやがて同じ悩みをもつであろう。

こうして今や過去十数年間完全にインフレから解放され、物価の安定を誇ってきた社会主義も、現代資本主義と同様にインフレに悩みはじめている。またそれとともに東欧諸国は、経済援助や貿易を通じ西側との関係を拡大せざるをえなくなっているし、いくつもの国々は西側の諸国にたいし莫大な債務を負うにいたっている。その結果、東の世界における緊密性は弛緩し、対立矛盾を強めてもい

る。この対立が、もう一度協調体制を回復できるかどうかは、現代社会主義を考える上で極めて興味ある点であるが、社会主義国においては、それがイデオロギーの対立となり、また軍事力で物事の解決をはかるうとする方向に走りやすいために、東の世界における協調は西側以上に困難のように見える。

以上の点からも、新しい社会主義体制の模索が課題として浮かび上ってくる。80年代はこれまでのスターリニズム的な社会主義体制はゆきつづまり、崩壊を強めるであろうが、だからといって、私は、それらの国々が資本主義に後もどするとは思わない。むしろプロレタリア的民主主義を否定したこれまでの独裁的、中央集権的な社会主義体制そのものの基盤が問われ、国民の広範な参加によって、そのエネルギーを汲み上げるような体制が探求されることになるであろう。もともとこの方向へ順調に進むかといえ、私ははなはだ悲観的である。おそらく80年代はソ連も中国も、新旧の社会主義が極めて深刻な摩擦を起こしながら格闘していく時期であろうと思

最後に南の世界だが、73年のオイルショック以前の世界経済の構造は、国際収支の面で北の世界は黒字、南の世界は赤字であった。それ以後は、産油国、すなわち南(1)は大幅な黒字となり、北の世界と南(2)はおしなべて赤字となった。OPEC諸国では近代化投資が大規模に進み、西側の技術導入や南(2)からの労働力の導入がおこなわれ、一種の繁栄の世界ができつつあるように見える。しかし、この繁栄は先進資本主義国が50年代、60年代に経験したような経済の繁栄と政治の安定にはつながらないであろう。その原因は宗教が多様であり、人種構成が複雑であることにもあるが、何よりもこれらの国々には古い社会体制を強く残し、国内的に貧富、身分、教育等等の大きな格差を孕んでいる。このため、急激に近代化しようとする国内の摩擦が大きくなり、内乱あるいはクーデターなどが頻発することになりやすい。80年代の世界政治の噴火口は、この第三世界にあるという気がする。

一方、南の世界においては、国際収支の赤字は、石油の高値により猛烈な勢いで拡大している

価格によってその経済は破産状態を強めるであろう。現にもう経済が破産に瀕し、先進国から借金さえできなくなる国が生じつつある。このことは、それぞれの国において国内的に様々な動揺を拡大するし、対外的にも、かつての印巴戦争のように、南の世界の中で戦争が勃発することも十分に考えられる。ここにもまた、一つの噴火口があるわけである。 こうして南の世界は動揺と矛盾の中で、自らの経済体制なり社会体制をいかに選択するか、という問題に直面せざるをえないことになる。

このように見てくると、80年代はいずれの世界も大きな動揺と転換の時代を迎えている。こうした転換の時代になればなるほど、将来を見通すことは困難となり、多かれ少なかれ誤りも大きくなる。しかしそれだけにわれわれは社会科学の羅針盤をいっそう精緻にして、その中で歴史の進路をできる限り見定めていくことが必要とされる。80年代の世界経済の問題としたいと考えた私の問題意識もそこにある。

(第10回大学共同セミナーの主題講演より。 文責・編集者)

第106回大学共同セミナー

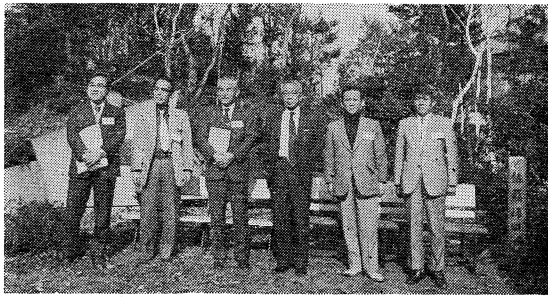
主題——一九八〇年代の世界経済

期日——昭和54年12月7～9日

△主題講演▽

東京大学名誉教授 大内 力氏
△ゲスト講演▽
一九八〇年代の世界経済と日本
信州大学教授 隅谷三喜男氏
△セクション演習▽

A 80年代の世界経済—その解明
のための理論と方法—
大内 力氏
B 一九八〇年代の資本主義圏—
アメリカを中心に—
東京大学助教授 馬場宏二氏
(運営委員)



左より、大内(秀)、佐藤、隅谷、大内、森田、馬場の諸氏

C 80年代世界経済と社会主義

横浜市立大学教授 佐藤経明氏
D 「発展途上国」経済の構造と展
望—国際関係と内部構造の両面
から—
東京大学教授 森田桐郎氏
E 日本経済の再編成—国民統合
の経済論理—
東北大学教授 大内秀明氏
△参加学生▽72名(内女子21名)
高崎経済大(11)、早大(9)、東大、
一橋大(各6)、東女大(5)、信州大
(4)、東外大(3)、筑波大、津田塾
大、法大、明学大(各2)、東京学芸
大、成蹊大、専修大、中央大、東経
大、東洋大、武蔵大、明大、立教大、
神奈川大(各1)、その他(6)、計25
校

◇

今回は、二年前に第96回共同セ
ミナー「現代の社会主義」を企
画、指導して下さった大内力先生
が、昭和54年3月、東大を退官さ
れたことを記念して企画されたも
のである。先生のご同意を得て準
備に入り、運営委員には前回のセ
ミナーの指導教授、馬場宏二氏を
煩わせた。まさに80年代を目前に
した時期にふさわしく、主題を
「80年代の世界経済」と設定し、
別記のように、現代の世界経済の
枠組を網羅した魅力的な構成と陣
容で実現することとなった。

◇
プログラムは、大内先生の主題
講演(フロント頁参照)を柱に、
セクション演習と全体会が極めて
有機的に結びついて、共同セミナ
ーの特色を最大限に活かしたセミ
ナーとなった。

二日め、午後と夜の二回にわた
って行われた全体会では、前半は
学生のレポートを中心に、後半は
は、そこで整理された問題点をふ
まえて教授陣が答える形式で、活
発な討論が繰り広げられた。人間
が直接に生産過程にたずさわる
という本来の社会主義の理念が、人
間解放につながるためには、社会
主義論の中核に「自主管理」が据
えられねばならない、ということ
が80年代の産業構造と、そこから
導き出される地方化・分権化の問
題を通して明らかになった。全体
会を通じて質問の要点整理、コメ
ンタリーの指名など、議長をつとめ
た大江正章君の手際がよい進行ぶ
りが見事であった。

◇

最終日は、退官記念プログラム
として、隅谷三喜男氏のゲスト講
演と交歓パーティが行われた。大
内先生との長い交友関係に立つて
の友情出演で朝早く馳せ参じて下
さった隅谷氏は、「体験的世界経
済論」と称して、最近滞滞して垣
間見た各国の経済の動きを平明に
語られた。

今回のセミナーは、退官記念の
趣意に沿って、第96回共同セミナ
ーの参加者が約五分の一を占めて
いたため、リユニオンの色彩が強
かったが、加えて、大内先生が津
田塾大学で教鞭をとっておられた
頃の教え子である佐藤共子一橋大

講師他二名の方々が最終日に参加
され、なごやかな交歓風景が初冬
の丘に展開された。

第106回共同セミナーに 参加して

大江 正章

「80年代の世界経済」と題する
今回のセミナーは私にとって極め
て意義深いものであったが、こ
こでは私の所属した森田桐郎先生指
導のDセクションの議論について
主として述べることにする。

まず「発展途上国」とは何か
話し合われ、それは一人あたり国
民所得のような「量」で測れるも
のではなく「構造」の問題である
として、S・アミンに触発され
つ、①経済構造が外向性をもち、
先進資本主義国に規定されている
こと、②経済の有機的統一(農
業、軽工業、基幹工業)が形成さ
れていないこと、③従属をもって
規定した。続いて70年代の工業化
や多国籍企業の分析に移り、「途
上国」の自立志向の中で、旧社会
の崩壊、新エリート層の形成とい
った社会的変動が起きていること
が明らかにされ、途上国に先進的
な工場やプラントエーションがで
きたが、それが国民のニーズとの結
びつきをもたず、経済的には先進
国の一部として「飛び地」になっ
ていること、多国籍企業が生産の
国際化を進める中で、「途上国」
には極度に単純化された生産工程
の製造分野というように、生産過
程の国際分業が起こっているこ
と、「途上国」のエリートは、生
活様式・行動様式において先進国
を模倣しようとする、そのた

め民衆と離反してしまうことなど
が問題となった。ここから80年代
の「途上国」のあるべき発展につ
いて私なりにまとめると、①工業
と農業のバランスをとった発展、
②国内需要と結びついた適正規模
な工業の発展、③大規模技術にも
とづく近代西欧主義の発展と異な
った、適正技術の具体的開発
もとづく「もう一つ」の文明の模
索、④新国際経済秩序の推進と
ともに「途上国」内部の経済・社会
構造の変革などであろう。さらに
重要なのは、我々日本人として、日
本の第三世界との関係の改善、特
にアジア諸国への「開発」の名の下
の経済侵略、公害輸出についての
厳しい批判が必要なことである。
一方、総括討論では、私は司会
ということで非常に疲れたが、活
発な討論が行われ、成功であった
と思っている。そこでは、最近の
社会主義理論の展開をふまえて、
分権化や参加に注目しての自
己管理社会主義への関心が高かつ
た。紙面の関係で議論の紹介がで
きないので、私の社会主義の定義
を述べさせて頂くと、「労働力資
本化の廃絶と社会的所有にもとづ
く再生産過程(生産から消費まで)
の自己管理」と言えるだろう。
最後になったが、ご指導下さつ
た先生方とこの機会を提供して下
さった大学セミナー・ハウスに心
から感謝するとともに、Dセクシ
ョンは1月より「森田会」として
学習会を継続し多数が参加してい
ること、私は4月から社会人とな
るが、自らの勉強を続けて再びセ
ミナーに参加したいことを付け加
えて、筆をおくことにする。
(早稲田大学政治学科4年)

第107回大学共同セミナー

主題——仏教と人生

——仏教における真・善・美の探求——

期日——昭和55年1月11日・13日

△全体講義▽

人間の主体性と有限性——仏教思想と西洋哲学——
法政大学教授 山崎正一氏

△ゲスト座談会▽

私の仏教観

京都大学名誉教授 西谷啓治氏
東京大学名誉教授 山内恭彦氏
（司会）筑波大学教授 三枝充恵氏

△セクシオン演習▽

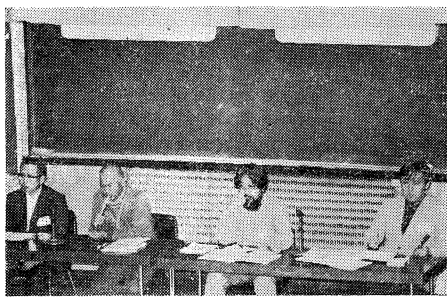
A 人生における聖なるもの——解脱と救済——
早稲田大学教授 峰島旭雄氏

B

無明と原罪——比較宗教学的考察——

C

仏教にみる美意識
東京芸術大学講師 島田外志夫氏



シンポジウム——右より峰島、吉田、島田、横山の諸氏

D 仏教の真理観

立教大学助教授 横山紘一氏
（運営委員）

△参加学生▽63名（内女子24名）

早大（7）、日大、東工大（各5）、東大、お茶の水女大（各4）、千葉大、農工大、慶大、ICU（各3）、東京大、信州大、静岡大（各2）、東京外大、法大、成蹊大、武蔵大、日本女大、青学大、名古屋大、正大、共立薬科大、武蔵野音大、大東文化大、埼玉大、大妻女子大、奈良女子大（各1）、合計29校

◇◇◇

80年頭をかざる大学共同セミナーは「仏教と人生」を主題に開かれた。人類文化の遺産として、精神的活力の源泉として、宗教の存在は今なお永遠のテーマであり、当セミナーの一貫して追求してきたところだが、今回はとくに「仏教」に焦点を当て、現代的アプローチを試みようとの共同セミナー委員会の提案があり、その企画、運営を昭和49年に開催された第73回「東洋と日本」で指導された横山紘一氏に委嘱。氏は、初の本格的「仏教セミナー」の実現に情熱を込めて構想を練られ、別記のように陣容を整え開催の運びとなった。

◇◇◇

初日の冒頭、山崎正一氏による全体講義は、氏特有のユーモアを

まじえての巧みな語り口で、仏教と西洋哲学の生い立ち、思想内容の異同を比較、解説して、聴講者を飽かせなかった。

仏教とギリシャ哲学が実はまだ宗教と哲学の未分化状態から出発した点で共通しており、このことが近代以降の西欧哲学思想にない精神の健康を保ちえていること、近代思想が科学的方法論の行きつくところに、単に真理価値のみの追求に終わっているのに比べて、善気を発揮しえたこと、誰でも仏教（めざめた者）になれると説く仏教、知恵そのものの開始として出発したこの思想の永続性と発展性、そこに力の意志、力の信仰にまで偏向していった近代西欧思想を自滅の危機から救い出す明日への精神の拠りどころを見出せるのではないかと、など今回のセミナーの基本命題のいくつかを参加者に投げかけられた。

に拠っている自分自身を発見し認識したことも一つの収穫になったのではないか。そんな熱っぽい報告が三日めの全体会で各セクションの学生からなされた。

三日め、朝食のあと講堂で全体会が始まり、各セクションからの学生による報告、質疑、各指導教授のコメントがなされる頃、降りはじめた雪が見る見る屋外を白銀一色にかえていった。新春セミナーにふさわしい天の演出が加わったわけだ。

て十全に実現された三日間があったといへば、大袈裟だらうか。大学共同セミナーの第一〇七回として、初めて仏教が主題に取り上げられたわけだが、歴史的地理的に多様化された仏教の伝統的な実践と思想と、それに纏はる数々の習癖とが、少しもわれわれを圧迫することが無かったといふのもその理由であらう。

これには「真・善・美の探求」とした横山さんの企画と、哲学者でもある大乗比丘の方々の講義・演習への参加を可能にした実行力とがものをいってゐるが、同時に大学セミナー・ハウスの創造の場としての意義が大きく感じられたのも、参加者全員の気持といつても間違ひはないだらう。

以前にこんなことを考へたことがある。もし私にどんな家でも新築することが許されたらすれば、たとへば寝殿造りの邸宅などを建てれば夢のやうだし、欲をいへば後宮もほしい。ところが、現代にそのやうな生活が実現できたとしても、それをやる私はちっとも美しいものではないと予想される時代におわれわが生きてゐることを識るだけのことであった。

セミナー・ハウスの村は、そんな私にとって新宮殿であった。庭園の坂道にちりばめられた教室、宿舍などへの往來の不便さが、むしろ生活の美しい遊びとなるやうに設計されたからだらうか。

それにこの事業に従事する人達が美しい。その優しさに表はれる本物の謙虚さは、自己に敵しい宗教生活者のものやりにさへ感じられた。それでゐる何の押し付けもない。営利を目的として働くの

質素さの中の美感

東京芸術大学講師
島田外志夫

自由といふのは大昔に遡る言葉だが、いまここにそれが感情とし

ではない人達の目差、いやそれ以上、愛に缺けず、将来に希望をもつて働くものたちの姿が見られた。

われわれが不自由さを少しも感じなく共同研究ができたのも、この建物と人柄との構造に荘厳も重厚も強請も全く無かったからである。このやうなあり方で事業を進められて行くのは希有なことであり、その推進の原動力の飯田館長の無我に徹したのでなくてはあり得ない精神性に感嘆するばかりであった。質素さの中に美感を陥没させない。たとへば、セルフサービスのレストランで、食器はお盆から出して並べられる。片付ける時は、合理的に誰かがまとめて運ぶ。返却口は輻輳しない。強請されるでもなく成り立ったこの習慣に、懐石料理の心に通ふものを発見したと語る館長の言葉は愉快だった。道元禪師は「赴粥飯法」に見るやうに食事の美学をも仏道で捉へてゐる。

聖なるものを求めて

松本高志

存在は、存在それ自体と無との両者を包摂する。不安とは存在が非存在でありうる可能性を自覚している状態である。それは無の不安であり、有限なる存在が自己の有限性を自覚することなのである。(ティリッヒ)

今回のセミナーのテーマは「仏

教と人生」であったが、洋の東西や宗教の別を問わず、人間がかかわらずにいられないのが、この問題であろうと思う。私は全体講義をこの視点から聞いていた。全体講義は、絶対は相対を(そして無限は有限)も内包しなければならぬといううかたちで、究極的現実を問うていくための手がかりを提示したと感ずる。無が自己のものと感ぜられるとき、人間はそこに破壊性、否定性を感じない。そしてそれが一時的なものでないと知ったとき、どこかに究極の肯定を求めざるを得ない。この揺るがない肯定の一点を、どのような体験、直観のもとに見出すか。

私の参加したAセクションでは「聖なるもの」に参与すること、「人間が人間を越えて人間になること」をめぐって演習が進められた。私はといへば、問題をこの肯定の一点を見出す体験そのものに絞って参加したため、話をそのような方向にばかり持ってしまいました。講師の峰島先生をはじめ、どなたも熱心に、これに応じてくださった。もちろん、答えがすぐに出る問題ではないし、論議や論証の対象ともならない。この問題については峰島先生の「聖なるものを感じたことがありますか」との問いかけが口火となつた。これに対する体験談のいくつかに身がひきまわされた。何かある深淵を指し示しているらしい感じをうけながら、しかし手の届かぬもどかしさを感じ、そして、何であつたのかを話し合うために来たのだと、この時思った。

(東京大学人文科学M1)

第1回大学院共同セミナー

二回連続セミナー(冬の一部)

主題—諸学の系譜と真理愛(その二)

—方法論の再検討—

期日—昭和54年11月30日~12月1日

全体講義

真理を求めぬ心

東京大学名誉教授 前田護郎氏

A セクション演習

科学と宗教—進化論をめぐって

立教大学教授 塚田 理氏

B 社会科学における客観性と価値

明治大学教授 田村光三氏

C ホモ・エノミクス論再考

中央大学教授 山下幸夫氏

D 物理学とは何か(2)—自然科学と人間性

上智大学教授 鈴木 皇氏

人間を科学する道—心理学と私

聖心女子大学教授 岡 宏子氏

(運営委員)



第1回大学院共同セミナーここに実る

「Love」に現れるところのヘブライ的思想に流れる他動性が、われわれを真理に導くことを明らかにされ、「前田聖書学」の真髄を語られた。

一方、プログラムの最後に組み入れられた岡宏子氏のイヴェニング・レクチャアは、一人の心理学者がどのようにして学問をしてきたかを語った一つの自叙伝でもあり、同時に、どうして専門を選んだか、という動機がそのまま学問の方法に結びつくというこの証し、即ち、心理学の行動レベルの中で見出されたものが、自然科学の方法の中でこのことばに対応できるかを探る試行錯誤の道程の披露であり、氏の独特の魅力ある語り口で参加者を完全に魅了した。

◇ 昨年6月末に行われた第一部・夏の部につづく、第二部・冬の部が今回の企画である。大学院共同セミナーの発足の経緯は、すでに夏の部で詳しく報じているので、本号では冬の部の概略を記すにとどめた。

◇ 夏の部が、指導教授の講話を中心として編成されていたのに対し、今回は、各セクション演習に重点が置かれたが、あくまでセミナーの中心の柱は、前田氏の全体講義であり、「真理愛」は二回連続形式のこの大学院共同セミナーに一貫して流れる大きな命題であった。

前田氏は、聖書とは、神が誰であるかを描写したものでなく、神を信じた人間のことが書かれている書物であり、十字架上の死は、真理そのもの取り組む出発点となつていると、前置きされてから、ヘブライ的真理がA, B, Cにそれぞれ、A remains, Bに価値をおいていること、God is Loveばかりでなく、God makes

二回連続形式を取り入れたことは、参加者自身が半年の間にそれぞれの専門の中で第一部で喚起された問題意識を深めていくことを前提としたものであったが、実際に二回にわたって参加した者は九名で、当初に意図した結果にならなかったのは残念であった。加えて、Aセクション以外の人数が少なく、全体の構成面でアンバランスがあったこと、二泊三日から一泊二日に日程を短縮したことなど、大学院共同セミナーとして今後検討すべき点を残したが、参加者は一様に満足し、この種のセミナーの継続を希望する声が強かった。

最後に、秋から入院加療中の前田先生が、このセミナーに備えて他の予定を返上し、病院から直行してご指導下さったことを記して、先生への感謝とした。

『科学と宗教』に関する覚え書

上野 継 義

私は今回の共同セミナーの夏の一部にも参加をゆるされたが、その時に出席された大部分の人は、自分の専門とする分野の具体的な方法論を求めて集まっており、セミナーのテーマである「諸学の系譜と真理愛」の内容とかなり食い違ふところがあったように思われた。それに対して、この度の冬の一部では、その参加者の半数が夏の部の経験者であったせいも、その時の反省の下にテーマに即した問

▽大学教員懇談会委員会の発足のための準備委員会

——大学教員懇談会の新しい性格を考えるために——

昭和55年1月17日18時〜20時半/私学会館

昨年8月13日に行われた「大学教員懇談会」の方向を語る会」で、第16回懇談会の企画を協議するとともに、当懇談会のための常置委員会を設けることの可否が論ぜられた。大学教員懇談会は、昭和45年に第一回が開催されてより、教員レベルの大学間交流の機会として、またテーマによっては大学と社会を結ぶかけ橋として、その機能を果たしながら、当ハウスの継続したプログラムとして実施されてきた。その運営は、開催のついで、臨時に設けられた世話人会によって行われてきているが、これを維持し、さらに大学教員の連合体にまで育てるためには、大学共同セミナーや国際プログラムと同様に委員会制度をとり入れることの必要性が確認され、準備委員会委員長に電気通信大学教授井早康

題意識を相当明確にして、それに関連する文献なども調べて再会することが出来たことは大変良かったと思う。また、冬の部から初めて参加された人も全体の議論の方向がはつきりしていたため、かえって話題の中にはいり易かったように感ぜられた。

Aセクションでは、ダーウィンの進化論が出る19世紀中頃に境にして、科学と宗教との関連が歴史的にいかに変化してきたかを近代科学の方法論に焦点を絞って塚田先生が話され、それを足掛りに討論をした。ダーウィンの進化論以前の近代科学は、主観と客観とい

うものを徹底的に区別して、もっぱら客観世界のみを取り扱う科学の進歩は、主観の世界に属する宗教になんら影響を及ぼすものではないと考へた。このような方法論の基盤に立つことにより、科学は自立性を獲得して飛躍的に発展して来たが、今度は人間主体を無視して勝手に独り歩きするような事態を招いてしまった。ここに方法論の再検討がせまられる今日の状況がある。このような科学のひとつの曲り角にあって、ダーウィンのもたらした進化の考えを新たな視角から捉え直したホワイトヘッドやティヤール・ド・シャルダ

育の制度的な側面のみでなく、学問の裾野にわたる学術的なものを選び、専門の異なる研究者の交流の場とする。

③当面は、教授連合の組織を云々するよりは、懇談会メンバーを募り、会の開催通知を定期的に送付するシステムにする。

ついで、現在施行されている共同セミナー委員会内規をもとに、大学教員懇談会内規案を検討し、意見の調整を行った。新年度に入り次第、正式に委員会の発足を図りたいとの館長発言があり、一同了承して散会した。

なお、この委員会の名称については、大学教員懇談会企画委員会、同運営委員会、同常置委員会などが出されたが、単に大学教員懇談会委員会とすることに決定した。

〔出席者〕 井早康正、村田喜代治、大川信明、岡嶋道夫、柏崎利之輔、川村亮、小池生夫、小林善彦、下森定、関口利男、原一雄 (敬称略)

の思想は、科学の行き詰まり状態を打解するひとつの方向を指示しているのではないかと、というのが塚田先生の話しであったように思われる。一見すると、ダーウィンの進化論は弱肉強食、自然淘汰という一種の価値判断と結びつき、宗教と倫理的に鋭く対立するように思われる。ところが、ティヤール・ド・シャルダンの考えをみると、そのような価値判断から解放されて、「進化」の概念を(科学的にも思想的にも)適正な位置にもつてくる努力を怠らないならば、宗教の指し示す真理をより一層明確ならしめるのだということを知り、一種の驚きを感じると共に、決して人類の未来は暗くはないのだという希望さえ感ずることが出来た。

われわれの討論の結果出たものは、明確な結論というものではない。きわめて抽象的であつたところのないように思われるが、「出合い」が必要だというのがわれわれの到達点であった。出合いといふひとつの言葉は、いろいろな領域と次元に於て捉えることが可能であるが、とりわけわれわれのセクションでの討論の結果考えさせられたことは、学問の極度な専門化によって困難となつた学問間の対話を再び取り戻すための出合いについてであった。というのは、討論の過程で互いになかなか言葉が通じず、共通の話題へと進むのに随分と時間が掛つた。このようにみると、自分以外の専門分野で使われている専門用語や思考方法を理解することの重要性は勿論なのであるが、むしろそれより

も、共通の話題へと議論を運んで行く互いの意志または心構えの方が、はるかに大切なのだということが痛感した。学問間の対話も、それを支えている人と人との対話が基盤にならなければならず、そこには相手の意見を尊重し、正しいことを正しいと言へる「知的誠実」ともいふべき主体的態度が不可欠であると言えよう。

ところで、ここまで出合いという言葉の意味を辿つてくると、そのような誠実な態度というものは、学問という知的領域にのみとどまるのではなく、それをも一領域として含む全ての人間の営みの根底に存在しなければならぬものとなる。その時われわれの出合いの対象は、この世の「最後の者」(マタイ二十章)とならねばならない。いなむしろ、自分自身がこの最後の者であるとの自覚のもとに共に歩むこと。ここに出合いの最初で最後の意味が存在し、この真の出合いを求める「決断」こそ、世のエゴイズムを焼き切り、科学を正しい軌道へと導く転軸手となるに相違ない。もしも、この度のセミナーに集まつた者たちが、この決断を持ち再び出合いたときに、シェイクスピアの第一〇四番ソネットが真実となるであろうような事態となつていたら、それは実に美しいことである。

美しい友よ 私には
君は老い始める
私の眼がはじめて
君の美しさはあとのときのまま
君の美しさは変わることがない

(中央大学文学部4年)

● 事業部だより

● 12・1月の利用概況

12月は卒論の中間発表など、冬休みが始まる前あるいはその直後を選んで各大学の合宿、それに年末の常連グループなどで毎年活気に満ちた月となる。今年も昨年同月をしのぐ盛況ぶりです。月間グループ数一二(昨年一〇八)は9月に次いで本年度二番目に多く、宿泊延人数四、四〇八人(同三、五八〇人)は六〇%の利用率である。なお、この中には九大学二〇名のワークショップ「グレイン研究会」、四大学八四名のインター・カレッジ・セミナー、全国二五大学から一三二名の代表が参集したアイゼック(国際経済商学学生協会)・日本委員会、それに一九大学からの参加を得た当ハウス主催の大学共同セミナーなど、この月は大学連合グループの利用も少なくなかった。また、11・12月にまたがって開催された統計気候学国際学会、日本人学生と留学生が交流した慶大国際セミナーなどで、この月も国際セミナーに諸外国の研究者・学生を迎えることができた。

1月は、各大学の学年末試験の迫る時期となるため、大学関係の利用が減少し、グループ数五八、宿泊延人数一、六三四人(昨年同月一、五七八人)と今年もこの月の利用率は三〇%を割った。さて、一九八〇年最初の利用は1月6日(日)入館の筑波大・基礎医学系

研究会、駒沢大・電気美術研究部、そして経済地理学研究会の三グループ。二日後には新春恒例の東京神学大・教職セミナーに全国各地から教職者、大学院生など九名が参集した。学生利用では、学年末試験が私立大より遅く始まる国立大グループの占める比率が高まる月である。五日間にわたる自主合宿を実施したのは東大法学部「刑法学習会」の一九名であった。しかし、1月も最後の週に入るや試験を終えた私立大の合宿がそろそろこの丘に戻ってくるのである。

● 統計気候学国際学会

一九七九年は当ハウスにとって「国際集年の年」ともいえる。初の「日加会議」から、定例化した「日豪合同セミナー」にいたるまで、おそろしく開館以来最も多くの国際集会が展開された年である。そして同年最後の国際集会——統計気候学国際学会(International Meeting on Statistical Climatology)が11月29日から12月1日にかけて開催されている。これは米国ベルヌイ協会、日本統計学会、日本気象学会、創価情報科学研究所の共催によるもので、参加者の数において五〇人に満たぬ規模のものであるが、統計学と気象学とが合同で開催した国際学会としては世界で初めてのことであり、これは関係分野の研究者にとって画期的な出来事であった。統計気候学について創価大・池田貞雄教授(千人会員)に説明願った。同教授は一年半も前から同集会の会場に当ハウスを選ばれ、同国際学会運営の中心として活躍された方である。「気候デー

● 七泊八日の八王子合宿

杉野女子大学教授 田村 皖 司

この八王子の丘にご厄介になって早くも十数年の月日が経ちました。当初、三〇歳代で未だ血の気の多い、喧嘩はやかった江戸っ子教師も、今やおだやかで、白髪が目立つ五〇歳代の初老の紳士(?)になってしまいました。

そしてこの月日はそのまま私の「教育原理」教職課程の歴史でもあります。教職課程のなかの教職に関する専門科目としての教育原理が、三単位という点で規則通りなのですが、授業期間が一年半にわたるといふことと、その間に展開されていく七段階にわたる指導法をとっているという点で、私の教育原理は普通の授業の進め方と異なっています。

七泊八日にわたってこのセミナー・ハウスで行なわれる合宿は、実はこの指導法の総括にあたるものであり、頂点をなすものなのです。この合宿での総括は翌年の授業の改善への実際の示唆となります。現在の指導法はいわばセミナー・ハウスでの十年間余の合宿の積み重ねの結果といつてよいと

々は、天気予報など気象の研究や実務面に必要なことはいうまでもないが、経済・産業の設計・計画など社会における長期計画に基本的な情報を提供し、あるいは気候の災害の防止にとつても必要欠くことのできないものとして、近年その社会的需要は急激に増大している。そして、気象衛星や資源衛

思います。

学生は「メノン」「福音書」「エミール」「民主主義と教育」の四冊から一冊を自分のテキストとして選び、七段階のステップをふみ表・討論および最終論文の作成のためにこの合宿に参加します。

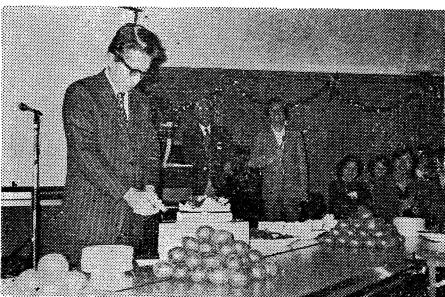
この合宿は他大学からゲスト教授を招聘すること、他大学から大学院博士課程の院生をアドバイザーとして参加を依頼するという二つの大きな特徴をもっています。ゲスト教授としてこの三年間(あるいはそれ以上)つづけてソクラテス研究として村井実(慶応大学教授)、イエス研究として八木誠一(東京工業大学教授)、ルソー研究として原聡介(岡山大学教授)、デュニー研究として大浦猛(埼玉大学教授)の各先生をおむかえし、ひとりひとりの学生の発表に対する指導と講義をしていただきました。

さらに院生諸氏は合宿期間中私たちと一緒に文章の書き方、発表原稿、論文作成その他について文字通りマンツーマンで学生の指導にあたります。今まで各大学からお呼びした院生はすでに二〇名をこえていると思いますが、これらアドバイザー・グループの中でも

星によって、気候データは飛躍的に豊富になっている。統計気候学は、そのような気候データから適切な情報を取り出す統計的手法と、国籍別参加者数は、米国(一二)、カナダ(七)、インド、インドネシア(各二)、フランス、ベルギー、香港、サウジアラビア(各一)、そ

特に白石克己、坂口耕史、大久保正健の諸氏の助力はそれぞれ四年間八回以上の合宿に及びました。この合宿は12月と3月(短大は7月)にそれぞれ前班と後班にかけて行なわれるのですが、12月には恒例のクリスマス祝祭と餅つき大会の行事にでもあります。他大学のユニークなものにまじって、杉野女子大の即席のファッションショー、舞踏研究部学生と教師のワルツなど今更ながら思い出されます。餅つきも毎年参加という学習の効果があってか白がよく見えるようになりました。また3月には職員の方々の手づくりになるカマボコ板のつかったかわいらしいお雑煮を頂いたことも忘れることができません。

最後に一言、合宿していつも感じることは、セミナー・ハウスの職員の皆様全員が心から私たちを常に暖かくむかえて下さるということです。滞在中学生が感じる喜びや感激はそのまま教師の喜びであり、感激でもあります。



クリスマス・ケーキにナイフを入れる田村皖司氏

れに日本(一五)で計九ヶ国四名。ベルギー国立気象研究所長のR・スナイヤー博士、筑波大学の吉野正敏博士、元気象庁長官の高橋浩一郎博士、その他この分野で活躍中のアメリカのA・H・マーフィ博士、O・M・エッセンワゴン博士、小河原正巳博士など、また統計学の小川潤次郎博士なども参加され、若手研究者も交えて三日間に二七件の報告と実質的な討論が行われている。

海外からの参加者が帰国後池田教授に寄せた書簡の一部を紹介させていただきます。

... The choice of the Inter-University Seminar House as location was inspired. I have never before seen such comradric develop among conference participants (E. J. Wegman=U.S.A.)

... Physical location is most helpful in bringing the participants together on both intellectual and social levels. The staff of the centre and of the conference have been most cooperative—perhaps more so than any other conference I have attended (I. B. MacNeill=Canada)

最後に、池田教授は「この程度の人数の国際学会がセミナー・ハウスにふさわしい。これからは自然科学系の小規模な国際学会がもつとここで開催されるよう、そして本当の意味の国際交流を体験していただきたい」と当ハウス推奨の言葉を残して下さいました。

●常連グループ紹介
杉野女子大「教育原理ゼミ」

—14年連続、春夏冬の長期合宿
当ハウスで行われる合宿研修は、当然ながらその目的や形態がまことに多様である。これからも毎号の「事業部だより」で、その折々の利用グループの中から、特徴的と思われる合宿を選び、それを推進しておられる方から「私たちの合宿」の紹介をお願いしていくことにしたい。各大学の読者諸氏が、当ハウスでの合宿を考えられる際、ここから何らかの示唆や啓発を受けることがあれば、この小さな紙面もまた、各大学の「情報交換のコナー」となり得るであらう。

この12月にもまた杉野女子大「教育原理ゼミ」の二四名が長期研修館で一週間の合宿を行ない、クリスマスや餅つきなど年末の交歓プログラムにいつもの元気な姿を見せてくれた。春夏、冬の年三回、それぞれの季節の風を運んできてくれるグループである。

同ゼミを育て、その指導の中心となつてこられたのは田村皖司教授(千人会員)である。同教授が初めてこの丘で合宿をされたのは42年、当ハウス開館二年目の春であった。それ以来実に一四年連続。特にキャンパスの一角に長期研修館が加えられたからは、一貫して同館を合宿の本拠とされ、毎年3月、7月、12月に休暇を利用して七泊八日の合宿を実施してこられた。通算して三三回、宿泊延人員は五、八〇人におよぶ。長期研修館は個室・合宿併用型の定員二五名の宿泊研修棟で、指導者のための独立した一室とセミナー室が併設されている。まさしくこのような長期合宿のために同館が

●フリッソン
—五周年をむかえて

東京医科歯科大学付属病院医師
小山 右 人

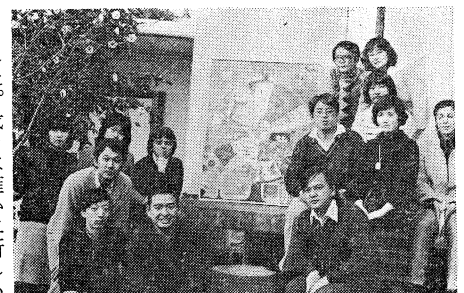
我々のグループ「フリッソン」は、一九七四年夏に行われた大学共同セミナー「芸術の楽しみ」において現在東京芸術大学の西洋美術史の助教でいらつしやる佐々木英也先生のセクシオンに参加したメンバーが中心になって発足しました。何と云つても我々が最初に出会つたあのセミナーは異様とまで言えるほど興奮に満ち、若者のエネルギーがみなぎっておりました。その頂点に達したのが最後の即興劇によるパーティではなかつたかと思われまふ。我々のセクシヨンの出し物は八王子の丘の上に美術館が出来たという設定のもとをブルドールの弓を引くヘラクレスをはじめ様々な彫刻がメンバーによって演じられました。本番まではそんな話はなかつたのですが、その彫刻になつた何人かが突然上着をはだけて彫刻のポーズをとりました。その彫刻が並ぶ姿は非常に迫力があり壮観でありました。そこまで盛り上げた我々の結束はその場だけでは終るはずもなく、その後何回も佐々木先生を囲んで集まりをくり返すうちに今日まで五年の歳月をあっというまに

過してしまいました。フリッソン(仏語で戦慄という意味ですが)という名前もつき、集るたびに我々の雰囲気も同調する人々も参加するようになりまふ。芸術を愛好する人々が楽しくサロンの雰囲気でも集うと同時に芸術や若者の諸問題などについて真剣に討論する場ともなつています。現在フランスの詩人、画家たちとの交遊も深まりつつあり、将来には国際的な芸術文化交流の場となることを願っています。

さて昨年のクリスマスに我々は五周年の行事を行うことになりました。従来セミナー・ハウスには記念に植樹することになつていましたが、我々は共同で絵画を製作し残そうということになりました。我々はユングについて勉強していたこともあって各人が内面に持つ夢幻的イメージを調和を保つ象徴的構図のマンガラの中に自由に描いてみようと思ひました。いざ描き始めてみると今まで絵をかいたことがなかつた人々からもすばらしい創造的エネルギーが引き出されるのには驚きました。ほとんどの人がキャンパスに張りつめたまま自分のスペースを確保するたまで大変なほどで、とうとう徹夜で五〇号の作品を完成してしまいました。その作品は様々な幻想にあふれ大変迫力のある力作とな

り、同グループもまたこの機能を最大限に生かしてこられた。大学で一年半にわたる学習を総括するこの合宿の日々は厳しいスケジュールの連続のようだが、学習効果を高めるためにもレクリエーションを織り込むなど、

楽しい共同生活作りの配慮も忘れていない。毎回一週間の合宿を終えてこの丘を下りる教師・学生双方の表情はいつものすがすがしい。今春3月の合宿終了後、田村教授が研究のため渡米されるので、この「教育原理ゼミ」の合宿は一



作品を前に、小山氏(左から2人目)とフリッソンの面々

りまふ。我々は確かに新しい芸術的体験をしました。徹夜の苦勞も新しいものを完成した喜びによって快い疲労感も変つていくのでありまふ。またもや我々は「フリッソン」という一種独特の集団の中にあつて不思議な魂の戦慄を経験したのでありまふ。社会的な枠を越え、我々にこのような魅力的な調和の機会を与え、育てて下さつた飯田館長をはじめセミナー・ハウスの方々の暖い御好意に深く感謝し、我々はこの五〇号の作品をセミナー・ハウスに末永く飾つていただくことにいたしました。(館長室をお訪ねになれば、この作品をご覧になれます。——編集者)

年間中断される。当ハウスにとつては一年ぶりのさびしい空白である。当ハウスとともに歩み、発展を続けてきた同ゼミは今一つの区切りを迎えるのであるが、これを機会に田村教授に同ゼミ一四年間の合宿の「総括」(9頁に掲載)

東京都立大学教授 馬場 英夫
早稲田大学講師 下森 定
神奈川大学教授 小山吉之助
工学院大学講師 吉田 倬郎
明治学院大学教授* 伊藤 信人
東京都立大学助教授 木島 淑孝
中央大学助教授 増田 茂樹
慶応義塾大学助教授 小池 生夫
中央大学助教授 富永 通夫
一橋大学助教授 村田 和彦
東京都立大学助教授 磯部 力
早稲田大学講師 鈴木 二郎
法政大学助教授 三上 昭彦
明治大学助教授 矢田 俊文
東京都立大学助教授 金澤 孝文
駒沢大学助教授 谷敷 正光
一橋大学助教授 田内 幸一
東京外国語大学講師 木畑 洋一
法政大学助教授 五味 健吉
東京外国語大学講師 日限 真澄
法政大学講師 加藤 豊

法政大学教授 伊藤 玄三
武蔵大学助教授 武内 清
慶応義塾大学教授* 横田 仁
鶴見大学教授 井村 君江
東京外国語大学教授 原 誠
法政大学助教授 田中 尚夫
早稲田大学助教授 鳴 武彦
早稲田大学助教授 成田誠之助
青山学院大学助教授 岡田 昌志
東京工業大学助教授 榎本 肇
東京理科大学助教授 大澤綱一郎
東京都立大学講師 山川 仁
上智大学講師 宇野 重昭
慶応義塾大学助教授 佐藤 榮峰
早稲田大学助教授 尾関 守
早稲田大学助教授* 梶原 正昭
早稲田大学助教授 大春慎之助
電気通信大学助教授 萩原洋太郎
明治大学助教授 須賀 庸夫
東京大学助教授 原 啓一
一橋大学助教授 竹内 啓一

一橋大学小平分校新入生学外合宿 伊藤 玄三
研修 武内 清
東京大学助教授 村上陽一郎
芝浦工業大学講師 畑 聰一
中央大学助教授 高窪 利一
杉野女子大学助教授 田村 皖司
東海大学講師 高橋 進
都立立川短大教授 吉田 幸弘
高千穂商科大学助教授 大島 英雄
和光大学助教授 篠原 睦治
独協大学助教授 高木健次郎
立正大学助教授 厚東 偉介
創価大学講師 高橋 宏孝
東邦大学助教授 吉田 光孝
第106回大学院共同セミナー冬の部 川端香男
グレイン研究会 師岡 孝次
四大学インター・カレッジ・セミナー 朝倉 孝吉
フリッドソン(第70回大学共同セミナー) 久場 嬉子
ナードセクションの集い 西尾 勝
国際経済商学学生協会日本委員会 堀部 政男
統計気候学国際学会 松尾 浩也
日本OR学会 大橋 幸
私立大学教員養成研究会 高橋 貞登
日本精神科看護技術協会 高階 秀爾
日豪調査委員会 合田 素行
文学教育研究者集団 浜谷 正晴
新英語教育研究会 貝瀬 輝夫
新東京日産自動車販売* 中里 明彦
ウエラ化粧品 兼光 秀郎
八王子大丸 矢沢修次郎
日電アネルバ 桜井徳太郎
日本水産* 高窪 利一
東京商工会議所 白梅学園短大教授 田中 未来
東京大学助教授 山田 善晴
工学院大学助教授 今井 義夫
法政大学助教授 諏訪 康雄
近畿大原子力研究所 小山 晃一

中央大学教授 富永 通夫
筑波大学助教授 井柳 堯
駒沢大学講師 田中 良昭
東海大学講師 高橋 進
日本大学講師 原田 行男
東京都立大学助教授 稲垣 寛
東京都立大学助教授 唄 孝一
東京都立大学助教授 河野 恵
東京薬科大学助教授 岡 義達
東京大学助教授 赤木須留喜
東京都立大学助教授 中本 正智
東京都立大学助教授 関口 忠
東京都立大学助教授 川端香男
東海大学助教授 師岡 孝次
成蹊大学助教授 朝倉 孝吉
千葉大学助教授 田中 国昭
一橋大学助教授 堀部 政男
東京大学助教授 西尾 勝
東京学芸大学助教授 久場 嬉子
東京学芸大学助教授 松尾 浩也
東京工業大学助教授 大橋 幸
東京大学助教授 高階 秀爾
東京大学助手 合田 素行
一橋大学助教授 浜谷 正晴
東京学芸大学助教授 貝瀬 輝夫
成蹊大学助教授* 中里 明彦
上智大学助教授 兼光 秀郎
津田塾大学助教授 矢沢修次郎
駒沢大学助教授 桜井徳太郎
中央大学助教授 高窪 利一
駒沢大学助教授 谷敷 正光
駒沢大学助教授 民秋 言
白梅学園短大教授 田中 未来
東京神学大学教職セミナー 日本女子体育大学助教授 河田 喬夫

地学団体研究会東京教師班 富永 通夫
興望館地域活動部研修会 井柳 堯
新東京日産自動車販売 田中 良昭
日本水産 高橋 進
松下電器 原田 行男
協同乳業 稲垣 寛
小西六写真工業* 唄 孝一
自治労日野市職員組合 河野 恵
郵政省貯金局 岡 義達
法政大学助教授 赤木須留喜
東京聖文舎 中本 正智
上智大学大学院生 関口 忠
東京ガス不動産* 川端香男
成城大学学生 師岡 孝次
【日帰り利用】 朝倉 孝吉
松下電器 田中 国昭
沖電気工業 堀部 政男
西尾 勝
久場 嬉子
松尾 浩也
大橋 幸
高階 秀爾
合田 素行
浜谷 正晴
貝瀬 輝夫
中里 明彦
兼光 秀郎
矢沢修次郎
桜井徳太郎
高窪 利一
谷敷 正光
民秋 言
田中 未来

◆開館15周年記念Ⅱ第109回大学共同セミナー

主 題 エネルギー・システムと現代社会
期 日 5月30日～6月1日
△ゲスト講演▽
I 80年代のエネルギーシナリオ
日本エネルギー経済研究所会長 向坂正男氏
II エネルギー問題と社会
朝日新聞論説主幹 岸田純之助氏

△全体講義▽
エネルギー・システムの主流と支流
横浜国立大学教授 太田時男氏
△セクション演習▽
A エネルギー経済の諸課題(深海

◆開館15周年記念公開講演会

主 題 エネルギー——その過去と未来
△講演者▽
日本学術会議会長 伏見康治氏
京都大学教授 吉田光邦氏
日時 6月2日(日)午後6時開演
場所 朝日講堂/後援・朝日新聞社

博明氏)／B資源・エネルギーの分配と南北問題(西川潤氏)／C産業におけるエネルギーの転換(佐藤光雄氏)／Dエネルギー技術と安全環境(石谷清幹氏)／E科学・技術史におけるエネルギー(道家達将氏)
△運営委員▽太田時男氏、野田春彦氏

◆編集後記

前号の新年特集「80年代の大学セミナー・ハウスに期待する」には反響があり、内と外とをつなぐ回線路としての本紙の役割を改めて確かめることができました。毎号、先生や学生の方々が寄せて下さる感想を掲載できることは幸せなことです。当ハウスのあるべき姿が、こうした貴重な意見を土壌にして培われたのではないのでしょうか。本号の島田外志夫先生の一文は、一人の美学者の眼がとらえた新鮮な観察です。編集子も虚心に読ませていただき、責任の程を深くしました。(能)

【個人利用】
産業能率大学助教授 山田 善晴
工学院大学助教授 今井 義夫
法政大学助教授 諏訪 康雄
近畿大原子力研究所 小山 晃一
【日帰り利用】

【個人利用】
産業能率大学助教授 山田 善晴
工学院大学助教授 今井 義夫
法政大学助教授 諏訪 康雄
近畿大原子力研究所 小山 晃一
【日帰り利用】

セミナー・ハウス 第66号
編集人 飯田 宗一郎
発行人 岡 山 猛
製作 中央公論事業出版